

所属学部：国際文化学部

学籍番号：18G0601

氏名：飯田円香

指導教員：鈴木 靖

2021 年度 法政大学国際文化学部 卒業論文

温又柔さんの作品から考える
私の「ふつう」 と 他者の「ふつう」

～温さんへの直接取材を基に～

法政大学 国際文化学部

18G0601 飯田円香

目次

はじめに	3
第一章 温さんが本を書くまでの軌跡.....	4
・文字としての中国語の出会い.....	6
・その「ふつう」は誰のもの？.....	6
・教師と生徒の“上下にならない”関係性.....	7
第二章 他者に対する考え方（一）.....	9
・緑珠で追体験された温氏のトラウマ.....	9
・乗り越えられない壁への絶望	10
・温氏の影武者『好去好来歌』.....	11
第三章 他者に対する考え方（二）.....	12
・『来福の家』と『好去好来歌』.....	12
・変化の理由➡1 つ目.....	13
・変化の理由➡2 つ目.....	15
第四章 他者に対する考え方（三）.....	
・『真ん中の子どもたち』の梗概.....	16
・感情を細分化し、トラウマに向き合う.....	16
・「他者」の存在を意識した作品作り.....	17
第五章 他者に対する考え方（四）.....	
・芥川賞候補作品『真ん中の子どもたち』の選考会.....	19
第六章 他者に対する考え方（五）.....	
・『空港時光（じこう）』の梗概.....	21
・温氏の等身大ではない、登場人物たちの「特別」.....	22
・対象の「他者」が増えた瞬間	23
第七章 他者に対する考え方（六）.....	
・『「国語」から旅立って』と「よりみちパン！セ」.....	24
第八章 他者に対する考え方（七）.....	
・『魯肉飯のさえずり』の梗概.....	26
・「父権社会」に抗う「女性」の姿.....	26

・「他者」が追加された温氏の世界	2 7
あとがき	2 8
参考文献	2 9

はじめに

本卒業論文は、2021 年 12 月 14 日に行った温又柔さん（以下、温氏）への取材を基に、構成をしている。温氏の作品に登場する主人公たちからは、読者である「他者」に対する考え方に変化があるように窺われる。それは小説と小説の間に刊行されたエッセイの単行本で自身を振り返ったり、読者から寄せられる感想や意見を取り入れたことによると考えられる。

「他者」と自分を否応なく比べてしまうこの社会によって、温氏の悩みや葛藤は生まれた。しかしその「他者」の存在がなければ、温氏の今の作風に辿り着くことはなかったかもしれない。そして「他者」を意識しているからこそ、「他者」を受け入れられる包容力の持つ小説を書くことができると考える。

昨今の社会では、「個性」を見出すことで存在意義が確かめられる風潮がある。インスタグラムや Twitter、YouTube などありとあらゆる SNS 上では、芸能人でなくとも自身の個性を発信することで、世の中に名前を広めていくことができる。まさに「他者」を意識していなければ、生き残れない世界がある。そんな世界に疲弊し、SNS 離れを試みる人もまた少なくない。

「他者」に振り回されながらも「他者」を意識せざるを得ない状況下で生きる人々は、感覚上は温氏と変わらない日々を過ごしていると言えるのではないだろうか。温氏がこれまで経験されていた苦労や、抱えていた悩みは、日本で暮らし、日本国籍を当たり前のようにもつ人々にとっては、理解し難いものかもしれない。しかし「他者への考え方」という切り口で、温氏と一緒に小説を読み解くことで、理解が難しく、踏み込むにはまだ勉強不足と思っていた諸問題に対して、取り組みの着手点になることができれば、と願っている。

第一章 温又柔さんが本を書くまでの軌跡

表 1 は温氏が台湾語・中国語・日本語を母語として生きてきた過程をまとめた略年譜である。

表 1

西暦	年齢	出来事
1980	0 歳	5 月 14 日、台湾・台北市で誕生。 ご両親ともに台湾・台北市ご出身。
1983	3 歳	お父様の仕事の関係で、家族 3 人で来日。
1984	3 歳	日本の幼稚園に通い始める。
1991	11 歳	5 月 14 日、日記を書き始める
1996	15 歳	都立飛鳥高等学校入学。第二外国語として中国語（簡体字）を学び始める。
1999	18 歳	法政大学 国際文化学部へ一期生として入学。
2000	19 歳	9 月、上海外国語大学へ留学（SA）
2003	21 歳	2 月、彩図社『とっておきの上海』刊行
2006	23 歳	法政大学 国際文化専攻修士課程 修了 小学校に通う外国人児童・生徒へ日本語を教える日本語講師の仕事を始め る。
2009	26 歳	『好去好来歌』で第 33 回すばる文学賞佳作 受賞 作家デビューを果たす。
		『たった一つの、私のものではない名前』
2011	27 歳	1 月、集英社『来福の家』刊行
2016	32 歳	1 月、『台湾生まれ 日本語育ち』単行本刊行 第 64 回日本エッセイスト・クラブ賞 受賞
2017	34 歳	7 月、『真ん中の子どもたち』刊行 第 157 回芥川賞候補
2018	35 歳	6 月、『空港時光』刊行 9 月、『台湾生まれ、日本語育ち』（白水 U ブックス版）
2019	36 歳	5 月、『「国語」から旅立って』刊行 「文学作品を通じて、複数の文化をルーツに持つ子供の豊かな可能性を示す とともに、日本語や日本文化の魅力を広く発信し、国際文化交流及び多文化 共生社会の実現に多大な貢献をしている」として、文化庁長官より表彰
2020	37 歳	8 月、『魯肉飯のさえずり』刊行 12 月、『魯肉飯のさえずり』が第 37 回織田作之助賞 受賞

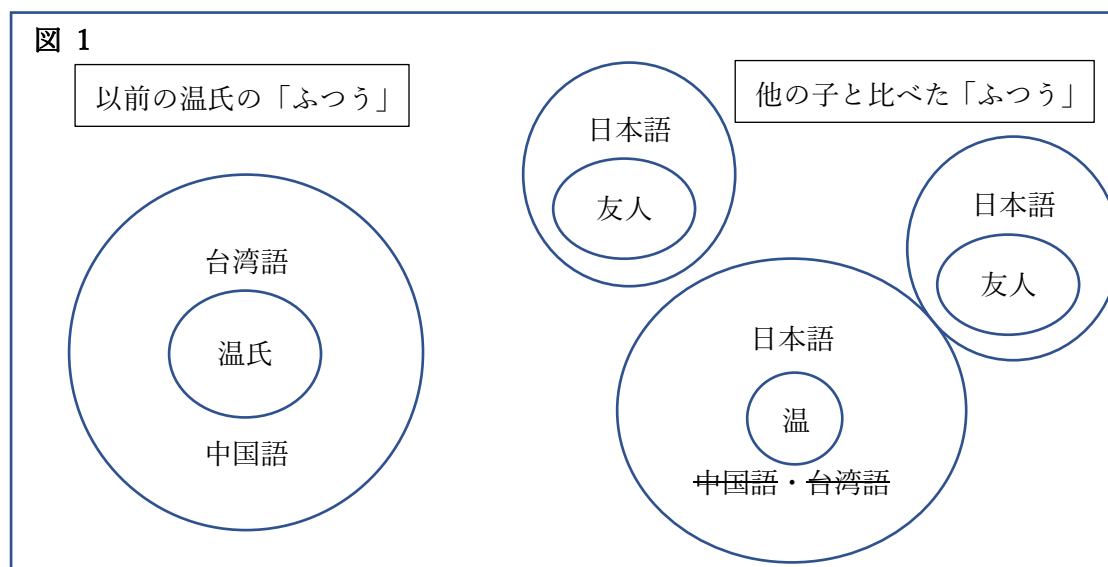
温氏は1980年に台湾の台北市で誕生し、台湾語と中国語の環境の中で3年の月日を送る。その頃の彼女は、周りの同い年の子より早くしゃべり始め、一つ年上の従兄を言い負かすほど、おしゃべりが大好きな子であった。

その後、父親の仕事の関係で、東京へ家族3人で移り住んだ。当初は日本語が分からず、口を閉ざしてしまっていた温氏であったが、当時3歳だった彼女は、文字ではなく音として日本語を吸収し始める。特に藤子・F・不二雄の「パーマン」や「ドラえもん」のアニメがお気に入り、アニメから生活に使う日本語を学んでいった。そのため、彼女の日常生活に日本語が新たに加わり、家庭の中では3つの言語が混在していた。しかし、まだ音だけで構築されていた彼女の「母語」は、“どれが何語なのか”の境界線は無く、区別されることはなかった。

1984～1996年の12年間は、東京の幼稚園、小学校、中学校に通い、日本語に溢れた世界に触れていく温氏。この時から、「ふつう」という枠組みに縛られてしまう経験を重ねる。温氏は「ふつう」に囚われていく過程をこう語っている。

「以前（＝1984年の幼稚園入園の前後）は、台湾語と中国語の文化が同じくらいの強度で自分を取り囲んでいたけど、学校へ行くようになると周りには日本の子供しかいなかった。幼少であっても当の本人（温氏を指す）としては、他の子と同じようになるのが当たり前だと思っているので、日本人の子供たちがやっていることが「ふつう」で、自分のお家のような感じが「ふつうじゃない」って段々と思っていくようになった。」

図1のように温氏は日本で多くの人と触れ合い、成長する中でこれまでの自身の「ふつう」が、周縁の人々の影響により「ふつうじゃない」ものへと変化してしまう。自らの生活文化圏を「ふつうじゃない」かもしれないと位置づけるようになった温氏は、



11 歳の誕生日をきっかけに日記を書き始め、自身の考えを日本語文として書きとめ、自分の字でいっぱいになった日記帳を自分が書いた本のように思うようになる。しかし、その日記帳には、温氏を取り巻く言語の一部である日本語しか存在していなかった。

文字としての中国語との出会い

1996 年 4 月に温氏が選んだ次なる舞台は、第二外国語として中国語（簡体字）が学べる、都立飛鳥高等学校であった。ちなみに中国語の表記には、簡体字と繁体字の 2 種類が存在する。例えば、中国語で「ありがとう」と表記するとき、簡体字では「谢谢」と書き、繁体字では「謝謝」となる。主に中国大陆では簡体字が使われており、台湾では繁体字が使われている。また、表記だけではなく単語や文法にも差異がある。¹

温氏が入学した年に同校の第一回入学式が挙行され、彼女は第一期生となった。その年は、高校中国語教育の萌芽期で、中国語教育実施校は 1996 年時点で 150 校を超えていたことが、財団法人国際文化フォーラムが 1996 年に発行した調査レポートで分かる。²温氏は中学生時代に三者面談で先生に勧められたことなどが理由となり、ここで、初めて文字としての中国語と対面する。

その「ふつう」は誰のもの？

中国語に 3 年間触れ、大学でも中国語を勉強したいと考えた温氏は、1999 年に法政大学・国際文化学部にて一期生として入学し、翌年の中国・上海の短期留学に向け意気揚々としていた。しかし、大学での中国語授業の初回に、日本人の中国語教師から彼女の中国語の癖を指摘されてしまう。

先に述べたように、中国語の表記には「簡体字」と「繁体字」の 2 種類があるが、中国語の発音はそれよりも種類が豊富で、地域によって特色が出やすい。例えば、中国語で「食べる」という意味の動詞「吃」は、中国大陆で話される「普通話」（標準語）では「chī」と舌を捲くように発音するのに対し、台湾などの南方地域では「cǐ」と舌を捲かないで発音する。日本の多くの大学では「中国語」というと、北京などで話されている「普通話」を指すため、多くの教師はそれに則って発音方法の指導をする。

温氏が入学した国際文化学部の中国語の授業も例外ではなかった。南方特有の発音をした彼女の中国語に対し、当時中国語授業を担当していた、ある教授は“南方訛り”であると指

¹ 陳疏敏「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字の語彙は同じか：台湾及び中国の中国語との比較」（言語文化と日本語教育第 24 号、2002 年 12 月）

² （財）国際文化フォーラム 高嶋伸和「いま高校の中国語教育を問い直す～外国語教育が直面する課題と提言～」〈言語と文化シリーズ 3、1996 年 4 月〉

摘した。当時のことを振り返り、温氏はこう語る。

今思うと、その渦中にいた時は（教授の指摘は、）それほど大ショックを受けた覚えはない。けれども、「ある言葉」を「誰」が標準語と定めているのかってことは、この頃からすごく意識するようになった。

温氏の作品には、主人公の中国語を指摘される場面が多々あり、その度に主人公は自身のアイデンティティについて深く悩み、「ふつう」に対する抗いが見られる。大多数の人の「ふつう」が、果たして全員に当てはまると言っているのか。また、それを押し付けるようにしているのか。温氏の思考が深まっていく瞬間でもあった。自身の作品と、この出来事との関連性について、温氏はこう語る。

自分が子供の時から喋っていたはずの中国語が、ここでは標準的ではない。ここでは南方訛りって捉えられるんだなって。でも台湾に行ったらこれが標準なの。という「ふつう」の中国語ってなんだろう、「ふつう」の日本語ってなんだろう、ということを考え始めた最初の芽生えだった気がします。

それがあったから最初の本（好去好来歌）の中でも、南方訛りと言われた時の自分の動揺とか驚きを、何回も追体験したくて、この素材で書いたような気がします。

教師と生徒の“上下にならない”関係性

こうして「ふつう」とは誰のものなのかを作品に表すようになった温氏。しかし、作品を創作していくと同時に、様々な立場の主人公目線になることで、当時の出来事も多面的に捉えるようになったと語る。

（学生だった当時は、）一人の台湾生まれ、日本育ちのあまり中国語ができない日本人からすると「なんで私を認めてくれないの」っていう自分の怒りがメインでした。でも先生の立場から見たら、言語を教えるのだから、スタンダードな語学を教えなければいけないって。

例えば、海外育ちの日本人がゼロから日本語を勉強しようとして、まだ“あいうえお”も書けないのに、関西弁で「こんにちは」って話したら、それは“関西訛りだ！”って絶対言うと思うんです。

だからこの問題をいろんな角度で、いろんな主人公の経験として書いていくうちに、先生の気持ちが分かってきました。語学講師としての“ある程度の仕方なさ”と。

このように当時のことを捉えた温氏は、当時の「教師」と「生徒」だった、教授と温氏の関係性に注目した。“立派で少し怖い先生”とされていた中国語教師として教壇に立つ教授と、19 歳になったばかりで中国語にそれほど自信のない生徒・温氏の立場の違いは歴然としていた。その関係性の中で、“南方訛り”と頭ごなしに否定されると「先生に認められたい気持ち」と「幼いころから染みついた癖がなかなか取り切れずもどかしい気持ち」の狭間に置かれ、それでも合格点を出してくれない教授の存在が段々と怖いものへと変わっていった。

この関係性は小説の中にも多くみられ、複雑なルーツを持つ主人公たちはその度に自身のアイデンティティに悩む姿が描写される。温氏の作品を読む読者の中には語学教師も多く、語学を教える上でどの点に気を付ければいいのか、といった悩み相談も時折されるという。それに対し、温氏はこう話す。

「正しい中国語」や「正しい日本語」を押し付けるのはいけないと思う。
でも「通じる言葉」を教えることはすごく重要なことだから、関係性が学生と出来ていれば、矯正という行為をしてもいいんじゃないかな。

ただ、それは相手を尊重したうえでのこと。

もちろんその先生が私を尊重してなかったわけでは全くないけども、圧倒的に向こう（教授）が優位で、圧倒的にこっち（温氏自身）にコンプレックスがあったので、（温氏と教授は）ちょっと不幸な出会いだったなって思います。

この時語った“コンプレックス”とは、自信をもって「私の中国語は南方訛りではない。台湾風の中国語です」と言えるほどの中国語能力がなかったことだ。正しくは、自信をつける過程で自身の中国語に自信を持てなくなってしまった。「吃」を「chī」だけではなく「cī」と発音しても、その中国語の存在を認めてくれる環境があることで、安心して堂々と南方系の中国語を話すことに繋がり、自身の肯定的なアイデンティティの構築を育めるのかもしれないと考える。

以上、温氏が小説を書くまでの道のりを辿ってみた。次章では温氏の取り巻く環境を念頭に置きつつ、小説やエッセイを通して温氏の「他者への考え方」を考察する。

第二章 「他者に対する考え方」(一)

この章では 6 冊の小説と 2 冊のエッセイを基に、温氏がもつ「他者に対する考え方」の変化を考察する。温氏の作品には、自身とよく似た境遇の主人公が登場し、当時温氏自身が抱えていた悩みが書き表されている。温氏自身も数ある小説を「自身の追体験を書くのに必死だった」と語る。特に、小説家としてデビューするきっかけになった『好去好来歌』の主人公・楊縁珠のトラウマだった南方特有の中国語発音や、名前を囃し立てられるシーンなどは、かつて温氏も経験した出来事であった。その他にも、この小説には“乗り越えられない壁への絶望”が描かれている。

縁珠で追体験された温氏のトラウマ

ここで一度、『好去好来歌』の簡単なストーリーと楊縁珠の紹介を行う。

楊縁珠は、3 歳の時に家族と共に初来日し、中華民国・台湾国籍をもち、日本で 16 年間暮らしている女子大生だ。もう一人の登場人物、田中大祐（愛称：麦生）は、縁珠よりも 2 歳年上の男子大学生で、縁珠の恋人である。ラブストーリーが展開される水面下では、縁珠の悩みも展開される。台湾人の両親をもち、台湾国籍を有している縁珠は、周縁の日本人や台湾に住む親戚との違いに悩み、周りの「ふつう」に翻弄される。

温氏は実際に、自身と楊縁珠を重ねていた。小学校の帰り道に二人の男子が「ようえんじゅだ、ようえんじゅだ」と縁珠の名前を連呼して歩いた。縁珠の行動一つ一つに「ようえんじゅが逃げた、ようえんじゅが逃げた」「ようえんじゅの仲間だ、ようえんじゅの仲間だ」と反応し、毎日毎日それが繰り返されていた。温氏も小学生時代に「おんゆうじゅうだ、おんゆうじゅうだ」と上級生男子に囃し立てられた悲しい過去を持つ。その近くにいた友達にも「おんゆうじゅうの仲間だ」と呼ばれ、友達にも名前はあるのに、なぜ仲間になってしまうのかと考えていた。

また、温氏のトラウマはもう一つある。それは台湾特有の中国語の発音だ。先述のように、温氏は大学生時代の中国語の授業で、自身の発音は「南方訛り」とであると指摘され、これまで経験してきた事象全てが否定されているように感じ、その場にしか通用しない「ふつう」や「一般的」「標準的」に疑問を抱くようになる。

縁珠も、温氏そのものだった。縁珠の中国語教師の大林の口調は「一厳しいものではなかった。むしろ、ものやわらかかった」と書かれている。温氏が出会った教授とは少し異なる描写に一瞬ほっとする。しかしそのあとすぐに「吃 chī」の発音に対して指摘が入り、縁珠と大林先生のやりとりがしばらく続いた後、

「—あなたには、やっぱり難しいようですね。南方の人は、皆、できません。できるだけ最初のうちに、努力してください。正しい中国語を習得するには、初め

が肝心ですよ。」(傍点は引用者)

と大林教授に言われてしまう。

台湾は、確かに中国語圏で括るとするならば、中国と同じかもしれない。しかし台湾独自の文化、歴史を育んでいるからこそ、言語はそれを表すのではないだろうか。縁珠が言った「台湾は、中国ではないから……」という囁きの中に、政治的な文脈は見当たらないと考える。むしろもっと文化的な、道徳的な面で、言語の多様性を主張しているシーンではないか。

乗り越えられない壁への絶望

『好去好来歌』には「パスポート」「JAPAN PASSPORT」などといった正式書類を指す単語が70回あまり見られる。また、縁珠は高校生時代の同級生・吉川舞が学校にパスポートを持ってきていると知った途端、好奇心が抑えられなくなり、吉川舞にパスポートを見せて欲しいと頼む場面がある。加えて、吉川舞の名前表記がYOSHIKAWA MAIと疑いもなく書かれている箇所についても、「それ以外の可能性は、ない。むしろ、それで充分。そう思ったら、溜息が出てしまう。」と書かれていた。

その前、英語で自分の名前をローマ字で表すテストがあった際に、縁珠は迷いもなくYANG YUAN ZHUと記入した。すると大きくバツがついていた。幼いころから目にしてきた、重要書類の一つであるパスポートにはYANG YUAN ZHUと記載されている。しかし日本人の学校教師は縁珠の名前を「よう えんじゅ」としか知らない。そのため正しい答えとは認められなかったのだ。

本作品には、パスポートを意味する言葉が70回以上も出てくるとことや、日本のパスポートに強い関心を示したこと、加えて、何の疑いもなくパスポートの名前をそのまま書き表せるという、日本人であることを物理的に表すパスポートを所持できない楊縁珠は、日本のパスポートに憧れているような印象を与える。

これに対して温氏は、

「自分の持っていない物をもっている憧れ」ではなく、「自分が持ったことのない物を呆気なく持っている人たちへのもどかしさ」を著したかった

と語る。

縁珠は幼少期から、両親がパスポートを厳重に保管している場面を幾度となく目にしてきた。吉川舞に彼女のパスポートを返したときも、鞆ではなく机の中にしまい、筆箱などと同じ場所に素っ気なく片付けられてしまうのを見て、啞然としていた。また、麦生がパスポートを取得したことがないと知ったときも、日本での滞在にパスポートが不可欠な縁珠は愕然とし、驚かずにはいられなかった。このようなパスポートが出てくる場面は、縁珠の「ふつう」と周囲の「ふつう」の差が大きく、乗り越えられるものではないことを確信づける。

縁珠の「ふつう」と周囲の「ふつう」の差は、パスポートの扱い方だけではない。「母国」がもう一つの「母国」に「国」として認められていない事実や、「身内」に「身内」として

考えてもらえてない状況があった。

「中華民国籍（台湾国籍）」をもつ縁珠は、パスポートなどの正式書類上では紛れもなく台湾人である。しかし、彼女は幼いころから日本で育ち、中国語よりも日本語で自身の思考を表現することに長けている。また、日本社会や日本文化は彼女の人格形成に大いに影響しており、日本人と何ら変わらない。彼女にとって、日本も台湾も母国といえるだろう。しかし、日本と台湾の歴史関係は複雑で、日本は台湾を「国」とは認めず、「地域」として扱われている。そんな理由もあってか、縁珠の周囲の人々は、台湾を「国」として認めず、そこから来たのは嘘ではないかと疑ったり、言語は中国大陆の中国語だと決めつけたり、「台湾は、中国ではないから……」という縁珠の言葉に疑問を持つ者が出てくる。日本も台湾も「母国」と考える縁珠にとって、これほどの疎外感はないだろう。

また、縁珠は日本で生活した期間が長く、日本人と何ら変わらない文化や習慣をもっている。しかし、自己紹介で名前を発したその瞬間から、「日本人とは違う」というレッテルを貼られ、周囲と違う行動を起こすと「一もともと、ちょっと変わっているのよ」と同級生から噂話の対象とされてしまう。では、出生地の台湾ではどうか。台湾に戻ると、縁珠は親戚から「あの子はもう中国語は話せないんでしょ」と中国語で囁かれたり、地元の人から「May I help you?」と外国人扱いされたりする。「～急に可笑しくな（った）」という縁珠の心の裏側には、同じ台湾人なのに台湾人として見られず、日本人と認識されつつも英語で話しかけられる縁珠を、他人から見たら霧のようにぼやけていて、気を抜くと消えてしまいそうな存在として描き、縁珠の日本社会での生きにくさを表していると考えられる。

温氏の影武者『好去好来歌』

本作品には以上のように、温氏の過去のトラウマや考え、「ふつう」に対する批判が描かれている。

この作品ではまだ、温氏の中に「他者」の存在はなく、自身の体験記に過ぎなかった。しかしこの作品を経て、これまで声を挙げられなかった、さまざまなルーツを持つ人々が勇気づけられ、それに気が付かなかった人々も気づかされる新しい作品が誕生することになる。

第三章 「他者に対する考え方」(二)

自身の出来事を追体験するように書き上げた『好去好来歌』だったが、次に発表した作品『来福の家』は、前作に比べて温氏の「他者に対する考え方」が顕著になっている。それは、小説『好去好来歌』と『来福の家』の刊行の間に、エッセイ『たった一つの、私のものではない名前』で、日本語は日本人だけのものではない、という考えに行き着いたことが理由ではないかと考えられる。

一、『来福の家』と『好去好来歌』

2011年に集英社より出版された『来福の家』の主人公・許笑笑（愛称エミちゃん）は、台湾人の両親を持つが、彼女自身は日本で生まれ、日本で育った。『好去好来歌』の楊縁珠と少し似た主人公像であるが、そのストーリーや、笑笑の心情描写は、縁珠とは大きく異なる。

日本で育った笑笑は大学を卒業するまで中国語を学んだことがない。一方台湾で生まれ、7歳から日本で育つ姉・歡歡は、笑笑よりも中国語は堪能で、日本語教師養成学校を卒業後、日本語教師として働いている。卒業後は中国語を学んでみたいと考えた笑笑は、中国語の専門学校へ通うこととなる。台湾人なのに中国語を上手く操れなくても、名前が周りの日本人と異なっている、笑笑にはそれほど難しい問題ではなかった。『好去好来歌』に比べ、明らかに「他者」に対する考え方に変化が見られる。その変化とは、「他者」がいることで自分と世間一般とが異なることを思い知らされるが、それがあからこそ、「他者」がいるからこそ自身を肯定できる、といったポジティブな存在として描かれているからである。その点に関して温氏はこう語る。

物語としては古臭い部分（異なるアイデンティティを持って、日本で生きる人が日本人になれずにもがくという描き方）はある種典型的すぎたなと思ったんです。実人生を想えば、それは全く否定しないし、そのように悩んだと思う。でも、表現の仕方がある種、複雑な環境に育った人間はくよくよ悩まなきゃいけないっていう、よくあるストーリーの垂流でしかないのなかったことをすごく自分で思いました。

同じ経験をしていても、それを別の側面から見たら、すごくそれを肯定的に思える人たちもいる。その部分も裏として書いておきたいなって。次は全く同じテーマを全く別の側面から書こうと思って、『来福の家』にしました。

変化の理由～1 つ目

温氏の「他者」に対する考え方が変化した理由は、2 つあると考えられる。1 つ目は、「ちがうこと」＝「ふつうじゃない」ではないと考えるようになったことである。

それは、2009 年に出版された『たった一つの、私のものではない名前』のエッセイを書き上げる中で、温氏は見つけていた。自らのアイデンティティと向き合わなければいけない環境に、「もう少し、ここにいたい」と考える温氏は、日本で生活をするためには在留資格が必須である。これほど日本文化や日本社会と向き合い、愛の対象として日本に関心を抱いているにも関わらず、である。しかし、この境遇こそが温氏の糧になっている。

書いていた時は「もう少しここにいてやる。」っていう“私みたいな異分子がこの国にいる意味を知らしめたい”っていう野心とともにこの一文を書いた記憶があります。

逃げられたら日本なんて逃げ出したかったけど、やっぱりいるなら、自分が譲歩するんじゃなくて、自分のままでいられる感じでいてやる、って挑発的に書いた気がしてます。

この文章を書いた当時をこう振り返る温氏。2009 年の刊行から 12 年経った現在でも、

私が感じる（特に外国にルーツをもつ女性にとっての居心地の悪さ）この感情を、小説家っていう権力者としてどんどん発言したり、表現することで少しでも日本社会が変わるんだったら、当時と同じで「異分子としてここにいてやる」っていう意地はありますね。

このエッセイの特徴的なところは、2006 年と 2008 年の温氏の手記が載っていることである。この時期、温氏は「日本語しか操れない自分の居場所は日本列島しかないにも関わらず、どこに行っても日本人じゃないと思われること」にひどく落ち込んだ時期であった。英語を例に挙げると、英語圏の国はイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど様々にある。しかし日本語は日本列島でしか通用しない。このため自身が考える「日本人」の枠に収まらない自分が孤独に思ったのだろう。そんな絶望にも温氏は向き合った。

だからこそ、日本語を日本人以外のものでもあるっていうことを、もっと自分が追求すれば、自分が楽になれるんじゃないか

だからこそ温氏は、小説を日本語で書き続ける。公的書類や氏名は台湾人を表していても、

日本で育ち、温氏の「人」の部分形成した日本文化は、切っても切り離せない。だからこそ、日本文化に特徴的な「同調圧力」にも影響を受けていた。日本人として生まれ、日本で育った「生粋の日本人」であっても、この「同調圧力」には時に息苦しさも感じる。

体育の時間に自分だけ足が遅いことや、算数でみんなが分かる問題に自分だけが答えられなかった時の恥ずかしさは、多くの人が経験したのではないだろうか。温氏もそれと同様に「他の人より遅れているみたいなのがすごく嫌だった」と話す。

日本人、台湾人、外国人であることは他人との違いでしかないのに、平均ではないことの原因みたいに思っちゃって、それがすごく自分は嫌なのかな、ってこの時期に初めて言語化をするようになった。

国語ができないのは、自分が外国生まれだからだ、とか、友達とのコミュニケーションが上手くいかないのは、日本人の血が流れていないからだ、とか理由付けをしてしまうと、自分のアイデンティティが肯定しにくくなってしまう。しかし“歌がうまく歌えないのは、自分が日本人ではないからだ”という理由付けをどう思うだろうか。日本人であっても歌が苦手と思う人は多いだろうし、外国人であっても歌が上手い人はたくさんいることを知っている。それと同じなのだ。“国語ができないのは、外国生まれ”が理由なのではなく、自身はそういう特徴を持っていることや、“友達とコミュニケーションが上手くいかないのは、日本人の血が流れていない”からではなく、その友達と興味関心ごとが違っていて、共通の関心ごとがあれば意思疎通はできることが分かれば、自身のアイデンティティを肯定的に捉え、そして「平均ではないことの原因」とは考えないだろう。

しかし、日本社会にいる日本人がそれに気づく機会が非常に少ないからこそ、温氏のように、外国にルーツをもつ人が日本社会で暮らしていくのに居心地の悪さを感じてしまうのではないだろうか。“歌がうまく歌えないのは、あの子が日本人ではないからだ”という言葉に疑問を抱くのも同じレベルで、“あの子とコミュニケーションが上手くいかないのは、日本人の血が流れていないからだ”という発言に対しても疑問を抱くべきであろう。自分は文化の影響によって、このような特徴を持っているということを見失うべきではない。このことに関して温氏は、

周りもみんなバラバラな文化だったら、こんなにコンプレックスを抱かないと思うし、その社会のスタンダードが何かによって自分の価値の上下が決められているのかなって思いますね。

と語っている。

つまり、自分と他者のある一部分が異なっていたとしても、それは「ちがう」箇所があるだけで、決して「ふつうじゃない」ことを示すことではないことを、温氏は再発見したのではないだろうか。

変化の理由～2 つ目

変化の理由の 2 つ目は、解釈の異なる読者に向けた「温又柔」を確立したことである。『好去好来歌』が雑誌になり、読者層がより厚くなったことで、読者から寄せられる意見が多種多様となった。そこには、温氏自身がテーマとする「日本社会での生きにくさ」や「もどかしさ」などに対するさまざまな感想が寄せられていた。

私と同じような境遇の人たち（在日韓国人であったり、在日の別のルーツを持つ人たち）が読んだ時は、“こんなに楽に乗り越えられない”っていう言い方をされたんです。「もっと苦しかった、我々は。」と。でも「我々」と「私」は違うし。

逆に、日本人の著名な作家の人でも“わざと苦しんでいるように見える”っていう方をする方もいました。小説を書くためにわざと悩んでいる感じに見えるって。全く同じテキストなのに、日本人から見たら「あえて苦しんでいる」ように見える。でも在日コリアンの方々から見たら、「苦しみが足りない」ように見える。

この私の位置はなんだろうっていうことをすごく思った時に、その両方に対して、私自身はハッピーだぞ！っていうことを示したくて『来福の家』をそういう方向で書こうと決めましたね。

このように「我々」と一括りにされることに強く抵抗を感じる温氏が確立したものは、小説という媒体を「私」が感じ、考えたことを表す場にすること。このことから、「他者」と「温氏」の感受性は違うものであることを再確認しつつも、それに従うのではなく、さまざまな視点から、自身の感情をより細分化して「私」を書き続ける道を新たに開拓したといえる。

第四章 他者に対する考え方（三）

『真ん中の子どもたち』の梗概

さまざまな視点から自分の感情をより丁寧に書きだした小説が、2017年に刊行された『真ん中の子どもたち』である。

主人公の天原琴子（愛称ミーミー）は、日本人の父親と台湾人の母親をもち、自身は台湾・台北市で生まれる。高校を卒業後、中国語を学ぶために漢語学院へ入学し、中国の上海へ留学することになった。同じ漢語学院の学生で、留学期間中のルームメイトでもある呉嘉玲（愛称リンリン）は、台湾人の父を持ち、中国語が堪能な日本人の母をもつ。リンリンの家庭環境は、ミーミーと異なり家庭での共通語は中国語であるため、ミーミーよりも中国語が堪能で上級のクラスで中国語を学ぶ。もう一人の登場人物、龍舜哉は関西弁を「西日语」と表現し、リンリンと同じレベルの中国語能力をもつ。彼は両親のことを日本国籍がある“元中国人（戦後、台湾人の父方の祖父が来日するときに中華民国籍を取得したが、その後日本国籍を取得した。母は就職活動時に帰化をした。）”と話し、自身のことは中国人とも、台湾人とも、日本人とも考えている。

この3人は同じような境遇を持ちながらも、それぞれ自身のアイデンティティの捉え方が異なる。例えば、ミーミーは台湾人の母をもちながらも、中国語レベルが低いことを中国人に指摘されたり、リンリンと比べて中国語を上手く操れずにいる自分自身が、結局ナニジンなのか分からず、「区分」に拘ってしまう。リンリンはというと、台湾を「中国の一部」と認識する中国人に「南方訛り」を馬鹿にされ、激しく憤りを露わにしている。その怒りが、“あたしはみんなとはちがう。特別なのよ”と自身のアイデンティティを強く肯定することに繋がっている。舜哉は自身のアイデンティティについてポジティブに捉えており、ナニジンであるかという「区分」について曖昧に、いや、おおらかに捉えている。

感情を細分化し、トラウマに向き合う

この作品で、温氏は長い間抱えていた、台湾特有の中国語の訛りと徹底的に向き合っている。

『好去好来歌』では、温氏の等身大・縁珠が温氏の出来事を追体験する役割があったが、この作品では、

当時の自分と同じ年頃のミーミーが、同じことを経験したら、気の弱いこの子はどう反応するんだろう、っていうことを小説を通して追体験したかった

と話す。

教師から南方訛りと指摘され、自信を無くしてしまうミーミーの姿は、大学で中国語を学んでいた当時の温氏の姿と重なる。ミーミーとは対照的な性格の持ち主・リンリンが、中国大陸で話される「普通話」が標準的であって、台湾で話されている中国語が「南方訛り」とされることに強く抵抗している姿も温氏と重なる。この対照的な二人を登場させた理由は、「温又柔」の感情や考え方を二人の人物に分けて、表現したかったからだという。また、舜哉は自身のアイデンティティについて少し客観的にも見えるが、彼も温氏の一部だという。

（割とチャーミングに物事を捉えてて、）チャライ舜哉は、私がもうちょっと大人になったときの自分なんです。自分が当時、誰かに言って欲しかったことをこの人物に喋らせた、みたいな感じで作りました。

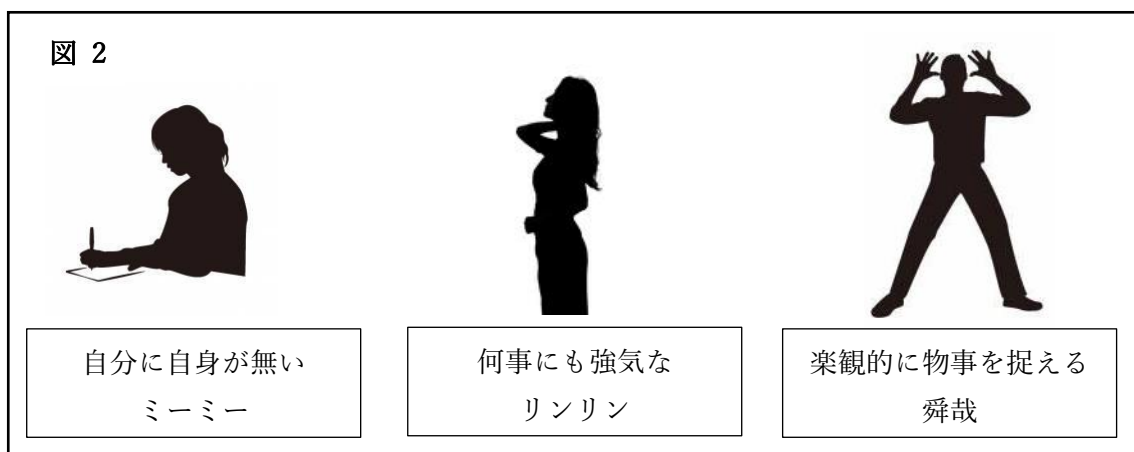
温氏自身の経験を、当時感じた年齢のまま主人公たちに重ね、等身大のストーリーを書き上げた温氏は、「紆余曲折しながらの完成だった」という。温氏がテーマとしている“母語は複数あっていい”という考え方を、そのまま主張しても、対照的な考え方をする人には伝わらないのではないか。そこで当初考えていた、2人の女の子という設定を変更し、異性を登場させることで、突破口を作り出し、友情や性愛的なことも含めた物語が出来上がったと言う。それによって“大人になるかならないかの曖昧な境界線”にいる3人の主人公が、徹底された区分けの中で“曖昧な線引きに置かれる自身のアイデンティティ”に向き合うことで、彼女ら・彼らの悩みとして読み手に経験してもらい仕組みが出来上がったのである。

「他者」の存在を意識した作品作り

この作品では、前作の『来福の家』以上に「他者」が意識されている。この時の「他者」とは、主人公たちのように環境に近い読者と、主人公たちの環境から遠く離れた読者である。

1つの小説で、作者が抱える悩みを書きつくすことは不可能である。そして作者もまた人間である。複数のルーツを持ちながら複雑な問題を抱えている人がいる事実もあれば、その人が笑い、人生を楽しんでいる瞬間だってある。1人の人間が、24時間365日悩みに明け暮れるのではなく、ご飯を食べる瞬間や誕生日を祝われる瞬間、その一瞬一瞬を楽しむ時もあっていいはずだ。複雑な悩みを抱えつつも、この主人公たち3人は一度きりの人生を謳歌するために、毎日を大切に生きながら、自分の信念を伝える時はしっかり伝える、そんな

図 2



生活を送っている。

その事実が、『真ん中の子どもたち』には溢れている。もちろん悩む時は、しっかりその悩みに向き合っている。しかし悩んでいるばかりでは、突破口は見つからない。逆転的な発想で物事を楽しむことで、新たな活路を見出せるかもしれない。温氏の本を、「こんなに楽に乗り越えられない」と語った読者にも、そんな瞬間があるのではないだろうか。

また、主人公たちの環境から遠く離れた読者の「あえて苦しんでいる」という感想も、温氏はうまく取り入れている。主人公たちの三者三様の悩み方を見ていると、悩みを抱えた時と同じような行動を起こす、自分と似た主人公たちが見つかるのではないだろうか。図2のようにミーミーは、とにかく落ち込み、一人で悩みを抱えるが、仲間を見つけたことで自信をもって自らの考えが言えるところ。リンリンは、自分の信念と違うことを言われた時に即座に反応し、自分の信念を貫くところ。舜哉は、自身の悩みをそれほど深刻な問題と認識せず、広い視野で自身の存在を受け入れているところ。「複雑なルーツ」をもつ3人の主人公たちだが、こんなにも1つの問題に対する考え方や態度が異なる。自分と似た主人公たちがこの中にいなかったとしても、自分の悩み方に対する姿勢を考えたり、「この問題」に関しての捉え方はこんなに様々にある、ということを知るきっかけにもなる。

温氏は、本書の主人公たちを「3人とも全部自分自身」とであると話していた。それに加えて、両極端にいる読者が、温氏の境遇をすっと胸の奥に落とし込めるような構造設定が、無意識的に行われていたのではないかと考える。従って、前作の『来福の家』よりも「他者」の存在が意識された小説になっているのではないだろうか。

第五章 他者に対する考え方（四）

芥川賞候補作品『真ん中の子どもたち』の選考会

『真ん中の子どもたち』は、2017年に第157回芥川賞候補作品となった。7月に開かれた選考会には、現代文学を代表する宮本輝さん（以下、宮本氏）がいた。彼は30歳の時に『泥の河』で第13回太宰治賞を受賞し、「宮本輝」というペンネームで作家人生を歩むこととなる³。宮本氏は幼少期に病気を患ったり、苦学生時代を過ごしたり、パニック障害で会社通勤が困難になった過去を持つ。そんな宮本氏が救われたのは多くの小説であった。小説家になった宮本氏は、芥川賞選考委員を24年間務め、現在は退任している。

芥川賞候補作として挙げた『真ん中の子どもたち』に対して、宮本氏は以下のような選評を述べた。

「これは、当事者たちには深刻なアイデンティティーと向き合うテーマかもしれないが、日本人の読み手にとっては対岸の火事であって、同調しにくい。なるほど、そういう問題もおこるのであろうという程度で、他人事を延々と読まされて退屈だった」（『文藝春秋』2017年9月号より）

この書評に対して、温氏は絶望したと言う。特に「日本人の読み手にとってつまらない」という言い方に傷ついたと話す。小説はそれぞれが様々に捉えるから面白いモノ、と温氏も理解しており、宮本氏自身が温氏の小説と相性が合わなかったことは仕方がないことだが、影響力のある人間が一一評論家としての意見ではなく一一“日本人の読み手にとって”の意見を述べたことで、大きな疎外感があったと言う。多数派の間に蔓延る「ふつう」を問うために小説を書き続けていた温氏にとって、見過ごすわけにはいかない書評だったのである。

これまで温氏が「自分のふつう」と「周囲のふつう」に神経をすり減らされながら、「分かってもらえないかもしれない一般概念」に疑問の声を上げながら小説を変化させてきたことを知る一日本人としては、「日本人の読み手にとってつまらない」と一括りにはされたくなかった。「日本人」にも様々な人がいるわけで、温氏の作品を読んで、私のように「ふつう」を改めて見直すようになった人がいるかもしれない。或いは「ちがう」点があっても、堂々と生きていいんだと勇気づけられたかもしれない。この作品の主人公たちのように、台湾にいた過去があっても中国語が完璧じゃなくていい、と自分を許せる日本人がいたかもしれない。その人々を全て切り捨てて、「対岸の火事」などというコメントは許されるのだろうか。

³ [The Teru's Club](#) ／ 宮本輝公式サイト (terumiyamoto.com)、2022年1月15日閲覧

もしかしたら宮本氏の「日本人」という枠組みは、日本で生まれ育って、これまで一度も外国へ出たことのない人や、外国の方と触れ合った経験が無い人を指す限定的な言葉だったのかもしれない。そう、『好去好来歌』の麦生のような。麦生は、縁珠が「日本人のくせに、どうして中国語を喋るの？」と言われた意味や、「パスポートができたら、一番に見せて」と言われた理由が分からなかった。だからこそ、宮本氏の「なるほど、そういう問題もおこるのであろう」という意識が必要なのである。「退屈だった」で終わらせてはいけないのだ。起こり得るかもしれない出来事は、もう既に起こっているのが現実で、それに苦しむ人々がいるからこそ、温氏は小説を書いているのである。そこを掬い上げる発言がもう少しあっても良かったように思う。

この一連の出来事は、温氏にとって次の小説を書く原動力になった。「母国、母語が一つであると信じて疑わない者」や、「日本語は日本人だけのものに疑問を抱かない者」、「自分のふつうが周りのふつうと思いついでいる者」といった「他者」を意識して、多様な「ふつう」が世の中にたくさん存在することを伝える方法を更に模索していく機会となったのである。

第六章 他者に対する考え方（五）

『空港時光（じこう）』の梗概

その出来事から1年後の2018年に、10編のショートストーリーと1編の台湾旅行記を収めた『空港時光』が刊行された。このタイトルにつけられている「時光（じこう）」とは、日本語では「時の流れ⁴」の意味をもち、中国語では「時間、生活⁵」などを意味する。しかし、温氏はタイトルの本当の意味と由来をこう話す。

台湾人の監督・侯孝賢（ホウシャオシェン）の映画「珈琲時光」にちなんでいます。タイトルがめちゃくちゃいいなって思っただけで、これが、コーヒーを飲んでる瞬間って意味で使っていたので、私もその「時光」っていう、光を含めた一瞬を切り取る、というちょっとエキゾチックな意味と、一瞬一瞬に光を当てたいっていう意味も含めて、このタイトルを付けました。

（それと、）「時光」って中国語っぽいんですよね。でも中国語で空港のことを「空港」とは言わないんですよね。そういう日本語なのか中国語なのかっていう曖昧な状態がすごく好きなの（もあって、）このタイトルにしました。

中国語既修者であれば、日本語の「時光（じこう）」よりも、中国語の「時光、时光(shí guāng)」の方が馴染み深いではないだろうか。少なくとも、私自身がそうだったため、無意識のうちに温氏の「ママ語」を取り入れていた。「ママ語」とは、温氏の母親の言葉を指す。温氏の母親が話す言葉には、中国語、台湾語、日本語があり、それらを自然に混ぜ合わせて1つの文章を織りなす。例えば、『台湾生まれ、日本語育ち』の中では、「リン・コレ・ゴン・ママ的壞話！」という文章があるが、これは「あなたたち、またママの悪口言ってるんでしょ！」という意味で解釈することができる。この文の「リン・コレ・ゴン」は台湾語で、「ママ」は日本語（中国語でも「お母さん」のことを妈妈(mā ma)と発音するが、ここではカタカナで記載されているため日本語と認識している）、「的壞話」は中国語である。つまり私は、この温氏の「ママ語」を取り入れて、このタイトルを『くうこう时光(shí guāng)』と読んでいたのである。

さて、『空港時光』には、「出発」、「日本人のようなもの」、「あの子は特別」、「異境の台湾人」、「親孝行」、「可能性」、「息子」、「鳳梨酥（オンライソー）」、「百点満点」、「到着」と名付けられた10編の短編小説がある。その中で中華民国籍、日本国籍、アメリカ国籍をもつ

⁴ 時光とは - [コトバンク \(kotobank.jp\)](http://kotobank.jp)、2022年1月16日閲覧

⁵ 時光の意味 - [中国語辞書 - Weblio 日中中日辞典](http://weblio.jp)、2022年1月16日閲覧

登場人物たちが、空港という曖昧な国境線が引かれる空間を舞台に、ストーリーが展開される。このような短編小説を書いた理由として温氏は、こう語る。

（前作の）『真ん中の子どもたち』以前の自分は、自身の等身大として描いていた主人公たち（緑珠やミーミー）の悩みをどう克服するか、っていうのをずっと書いてきました。（しかし、今回の）『空港時光』を書く時には、そのような子たちを眼差していた側の人たちが何を感じているのか、をテーマにしたいくてそのように設定しました。

温氏の等身大ではない、登場人物たちの「特別」

この作品に出てくる登場人物は、温氏とは全く別の考え方や経験を持つ人々と位置付けられる。「出発」の章では、台湾人の彼女と付き合っていた日本人の男子大学生が主人公だったり、「日本人のようなもの」では台湾人の従姉妹がそれぞれの境遇を羨ましがったりと、これまでの作品とは異なる主人公像が数多く登場する。しかしどの章も舞台は「空港」。誰もがその場所にいると、自分は今どこの国にいるのか曖昧になる。この感覚は、所属がどこか分からない曖昧な感覚と似ている。出国ゲートを過ぎれば、そこは元居た場所とは異なるが、到着先とも違う。帰国者と出発者が入り混じれば、傍から見るとどちらがどちらなのかも分からない空間である。そんな空間で、これまで自分が「ふつう」と思っていた自分自身が、何か特別なものをもつ「特殊性を帯びた人」へと変化しているように感じる。つまり、誰もが主人公になり得るのである。

例えば、「出発」の章で、台湾人の彼女に「ふつうの日本人に、あたしの何がわかるっていうのよ」と言われてしまった日本人男子大学生は、初の海外旅行先に台湾を選んでいる。これまで国外へは一度も出たことがなく、真新しいパスポートを握りしめている情景が描写される。彼にとって、今日は初出国の日。彼にとって特別な日がこの日始まっているのである。

次の章の「日本人のようなもの」では、日本語を勉強している台湾人の詩婷が日本へ3週間ほど来日する日の話である。日本語学校の高校生向けサマーコースに参加するために来日した詩婷は、長年日本に住む従姉の怡婷との再会に胸を躍らせつつも、「日本語を勉強するんだから」と強い意志をもつ。この日は、詩婷にとって長年の願いを叶える第一歩であり、初日であるのだ。詩婷の特別な一日も始まろうとしている。そして、日本で詩婷を迎え入れる怡婷にとっても、特別な日の始まりなのである。

少し毛色の異なる「特別」を探すと、「異境の台湾人」の章に2つ出てくる。俊一郎は恋人の Jessica の従兄の結婚披露宴に参列し、Jessica そっくりの顔立ちをした、日本に長く住み中国語は得意ではない Jessica の従姉と出会う。中国語を積極的に使って従姉と話す Jessica は、俊一郎が見たことのない姿だった。Jessica にとっても従姉と中国語で話すこと

が「特別」であっただろうし、俊一郎にとっても Jessica のその姿を見たことで「いつもとは違う」、「特別」な日に感じられたであろう。

もう1つの「特別」は、その Jessica の従姉と同時刻に、同じ空港で、偶然にも顔を合わせたことである。相手は気付いていなかったかもしれないが、その偶然性に俊一郎は「奇妙に胸を躍らせていた」。彼にとっての「特別」な瞬間がこの時あったのである。

最後に最もシンプルな「特別」を「可能性」の章に見ることができる。主人公の有貴は誕生日が4年に一度しかこない、閏年の生まれである。自らの生まれた日を「省略される運命にある」とし、「どこにいったんだろう？」とずっと考えている。これは前の3つの「特別」とは異なり、有貴から離れることのない「特別」である。彼女の誕生日は、その他大勢よりも少しだけ「特別」なのである。

対象の「他者」が増えた瞬間

このようにして、誰にも少しの「特別」性があることを描き著した温氏。この作品には、その一日だけ「特別」な日だった人、少しの「特別」をもって生まれた人が登場する。他者と比べた時に、自分は「ふつう」「多数派に属する」と思っている、人はなにかしらの「特別」をもって、日々を生きているのである。

『真ん中の子どもたち』では、温氏や主人公たちがもつ「特別」は「対岸の火事」と突き放されてしまった。しかし、温氏は『空港時光』を通して、温氏らの「特別」は、「日本人」にも起こり得る「特別」となんら変わりはないことを証しているのである。

以上のことから、この作品は「温氏らの悩みを突き放して考えてしまう『他者』」や、「無意識的に温氏らの境遇は、自分とは違うと判断してしまう『他者』」、「自分を普通の人だと思い込んでいる『他者』」を意識して、描かれていることがわかる。

第七章 他者に対する考え方（六）

『「国語」から旅立って』と「よりみちパン！セ」

次に刊行された小説は、2020年の『魯肉飯のさえずり』であるが、その前年の2019年に2018年10月～2019年3月まで新曜社のホームページに連載されていた温氏のエッセイが、『「国語」から旅立って』という単行本となって刊行されている。本書は、「よりみちパン！セ」というシリーズの一冊である。「よりみちパン！セ」は、2004年の創刊当時は理論社から刊行されていたが、2018年からは新曜社から刊行されている。

「よりみちパン！セ」は、「中学生以上すべての人へ」がコンセプトにあり、学校でも家庭でも学べない、今を生きるための豊かな知識を、各分野の第一人者が書籍に著す。一見取っつき難そうなテーマであっても、祖父江慎さんや100%ORANGEさんらが装画・デザインを行い、ポップで手に取りやすい本となっている。

『「国語」から旅立って』には、温氏のこれまでの全てが記されている。小学生時代、中学生時代、高校生時代、大学生時代、学生を卒業した大人時代といった、時代ごとに温氏の苦悩や葛藤、喜び、小説への愛情が書き表されており、これまで温氏の小説を読んだことがない人にも温氏の人柄や作風が分かる一冊だろう。「読書は孤独な体験」と、新曜社の「よりみちパン！セ」の編集部は言う。確かに読書は、知らない世界・予想もしなかった世界へ飛び込む時、一人かもしれない。しかし、読み終わった後は必ず著者が寄り添ってくれている、そんな安心感が温氏の小説やエッセイには溢れている。それに関して温氏は、

決めつけてくる人たちから傷ついた私が救われたのは、私の周りにいた“否定しない人たち”。私はなんとか運良く、周りが否定しなかったこととか、受け入れてくれたことで、なんとか今も元気で生きている。

でも、かつての自分が抱いていた孤立感や切なさ、苦しさを今抱えている人がいて、その人が独りぼっちかもしれないと思うと、せめて私の本で「大丈夫だ」って思える何かがあればいいなって気持ちで書いているところがある。

嫌なこともいっぱいあるんだけど、特に小説では「でもやっぱこの世はそんなに悪くない」という読後感を絶対作りたいって思っちゃう。本当は徹底的に絶望的な世界を書いた方が迫力あるかもしれないけど、最終的に本を閉じた時に「でも悪くない。行こっ。」みたいなことをどうしてもやりたくて、あえて良かった経験や救われた経験の方を結びにすることが多いですね。

と語る。

これまでは様々な境遇に置かれる人にも理解してもらうために、多様なバックグラウンドを持つ主人公（温氏のようなバックグラウンドの人や、それを支える人々）が登場するス

トーリーだったが、本書では、この世の誰をも包み込んでしまうような「寄り添うための作品作り」が、改めて濃厚なエッセンスとして温氏の中に加えられている。そして、これまで温氏が小説を書く上で対象になっていた「他者」の枠がより広範囲なものへと変化しているのである。

第八章 他者に対する考え方（七）

『魯肉飯のさえずり』の梗概

この作品は現時点（2022 年 1 月末）での最新作である。主人公の桃嘉は、台湾人の母と日本人の父の間に生まれた。桃嘉自身は日本で育ち、もはや日本文化は桃嘉を形成する一部となっている。

思春期に「周囲のふつう」と「自分のふつう」が異なることを嫌がり、日本語があまり得意ではない母に強く当たってしまう。そして桃嘉の就職活動はうまくいかず、恋人の聖司との結婚を決め、幸せな家庭が築かれるはずだった。聖司のためを思って作った魯肉飯だったが、「ふつうの料理のほうが俺は好きなんだよね」「日本人の口には合わないよ」と言われてしまう。家庭内においても、桃嘉は「日本のふつう」を押し付けられ、窮屈な思いを強いられる。

「父権社会」に抗う「女性」の姿

この作品では、温氏がこれまで扱ってきたアイデンティティという視点から「ふつう」を問うというテーマと、今回新たに取り上げた「父権社会」に対抗する「女性」というテーマの二つが描かれている。

台湾人の母をもつ桃嘉は、小・中学生になるにつれて、「周囲のふつう」と自身の環境が異なることに嫌気がさし、台湾人の母の存在を隠すようになる。また、周囲に珍しように色々聞かれる経験を通して、“自分は日本人だ”という意識が次第に強くなっていく。その一方で、大学生・社会人の時には、台湾文化を否定されると反論する桃嘉の姿が描かれる。桃嘉の成長過程から、自身のアイデンティティの揺らぎや、考え方の変化が見て取れる。“自分は日本人と何ら変わりはない。だけど台湾文化を否定されると他人事のように見過ごすことは出来ない”といった葛藤が生まれているのである。

また、もう 1 つの側面「父権社会に対抗する女性」では、「自分の常識＝社会の常識」と疑わない夫・聖司の言動によって、桃嘉のアイデンティティは否定され、自尊心に傷がつけられていく。自分を押し殺して周りのふつうに合わせ、傍から見ると誰もが羨む理想的な夫・聖司から離れることができないでいる桃嘉。そんな桃嘉を描いた理由を、温氏はこう語る。

主人公は自分の普通が信じられず、相手の普通に従っちゃって、自分を殺していました。でもこれは、間違いだったんだ、って気づいて自分を肯定するまでの過程を書きたかったですね。

いろんな普通があるんだよ、っていうことをもっとどんどん言っていきたいな

って思います。

（今の一般的な女性に対しては、）自分を尊重してなさそうな人とはさっさと縁を切ったほうがいい（と言いたい）。聖司のように「尊重している風で、実はもぎ取っている人」に対してのセンサーは磨いた方がいいよって、すごい思います。特に女性はね。

「他者」が追加された温氏の世界

前述のように、温氏の最新作には「アイデンティティについて」「マイノリティについて」「ジェンダー格差について」などたくさん問題提起が組み込まれて、1つのストーリーが展開されている。

1つの作品で、主人公の出来事を「自分事」として捉えられる読者は、これまで以上に増え、読者の層も広がったのではないかと考えられる。日本語に不自由な想いを抱きつつも愛するわが子の存在に勇気づけられる「他者」、その愛情を受けて育った「他者」、自分のルーツを否定された経験をもつ「他者」、性別を理由に抑圧された社会で生活を送る「他者」、そしてそんな世界に足を踏み入れたことのない「他者」が想像力をもって、読後の現代社会へ出ていく。なんら関わりのない様々な考えを持つ「他者」が、小説を通して「読者」となったとき、温氏が願う社会への実現がまた一歩近づくことだろう。

インタビューの最後に、作品を通して、いま伝えたいことは何かを尋ねた。

誰かが一方的に決めた普通や標準に対して、疑わずにみんなで雪崩れ込むように信じるのではなく、それぞれ歪な「ふつう」を愛おしめる余裕を、お互いに持ち合えればいいと思います。難しいけど、もっとみんな自分に優しく、そして人にも優しくして、優しい世の中になってほしいですね。

あとがき

この論文には「まとめ」は作りませんでした。いや、「まとめ」は私には作れませんでした。温さんの作品は、エッセイや小説、取材、読者から寄せられる感想や反応を通して、これからもっと多くの「他者」に対して、変化していかれると思ったからです。それを私は、結論付けてまとめることはできませんでした。

大学 1 年生の授業の中で初めて温さんの作品に触れた時、自分はなんて思考レベルが低い学生なんだろうと思い知らされました。高校時代も国際コースに進学し、英語圏へ 1 年留学もして、国際文化学部へも入学したというのに、あまりにも自分の「ふつう」と周りの「ふつう」に差異が無く、悩んだ経験も乏しいことを理由に、日本社会に蔓延る「ふつう」に疑問を抱くことはありませんでした。

大河ドラマが好きで見ていた「青天を衝け」の時代背景は、幕末から明治にかけての時代。この時、外国の人は「異国から来た人々」「日本の平和を揺るがす人々」とされ、敵視する日本人もいました。もちろん外国から来日して、日本に足を踏み入れることさえも許さない人もいました。渋沢栄一が駆け抜けた時代からおおよそ 100 年以上が経ち、年号も明治→大正→昭和→平成→令和と変わってきました。時代も社会もこんなにも変化しているというのに、人々の考え方が簡単には変化しないことが不思議でたまりません。

新型コロナウイルスが中々収束しない昨今、アメリカではアジア人差別が横行し、日本国内においても中国人差別が後を絶たなかった事実があります。人は、恐れる時多数派に属す傾向があると考えています。しかしその多数派によって、自分自身が苦しめられることもあります。

いきなり自分の固定概念を変えて、社会の常識を批判的な思考で捉えることは難しいでしょう。ましてや効率化・合理化を求める社会において、「自分を見つめ直すこと」によって時間の流れがあまりにも速すぎます。でも考えることをやめてしまえば、温さんの本を読む前の自分と変わらなくなってしまう。「考えることをやめない」ことが、社会を変える大事な行動だと思っています。

「利益を追求するだけの思考停止人間」になるのではなく、「社会を動かす思考を持つ人々」が増えることを切に願います。

参考文献

論文（著者名五十音順）

1. (財) 国際文化フォーラム高嶋伸和「いま高校の中国語教育を問い直す～外国語教育が直面する課題と提言～」(国際文化フォーラム事業・調査レポート:言語と文化シリーズ3、1996年4月)
2. 陳疏敏「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字の語彙は同じか：台湾及び中国の中国語との比較」(言語文化と日本語教育 巻24号、2002年12月)
3. 范淑文「真杉静枝と温又柔の比較研究の試みーグローバル化を視座にして」(比較日本学教育研究部門年報 巻16、2020年3月)

書籍（出版年順）

1. 温又柔『来福の家』(集英社、2011年)
2. 温又柔『たった一つの、私のものではない名前』(葉っぱの坑夫、2012年)
3. 温又柔『真ん中の子どもたち』(集英社、2017年)
4. 温又柔『空港時光』(河出書房新社、2018年)
5. 温又柔『台湾生まれ、日本語育ち』(白水社、2018年)
6. 温又柔『「国語」から旅立って』(新曜社、2019年)
7. 温又柔『魯肉飯のさえずり』(中央公論新社、2020年)

その他（サイト名五十音順）

1. Weblio 日中中日辞典「時光の意味」
2. 新曜社「本から広がる世界の魅力と、その可能性を求めて」
3. 宮本輝公式サイト「The Teru's Club」